

<報告>

CD《至福の憧れ ゲーテ歌曲の現在》制作の報告

Report on the Creation of the CD “*Selige Sehnsucht* — The Present State of Goethe Lieder”

梅本 実

UMEMOTO Minoru

本稿は2022年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けて実施したCD制作の報告である。「至福の憧れ～ゲーテ歌曲の現在」というタイトルで、19世紀を代表する文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832）、の詩に付曲された歌曲を集め収録を行った。「ゲーテの詩による歌曲」と題されたCDは、世の中に比較的多く出回っているが、そのほとんどが19世紀作曲家の作品に限られている。これはその時代の主要な作曲家たち、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ヴォルフ等が、ゲーテを崇拝し多くの歌曲を遺しているためである。今回の研究ではまずこれまでに遺されているゲーテの詩による歌曲を概観し、20世紀以降のゲーテの詩に付曲された歌曲も調べ、それに加え、現代作曲家伊藤祐二氏に委嘱作品を依頼し、時代を超えて作曲家たちに影響を与えたゲーテの詩とその歌曲の魅力を紹介することをねらいとした。

キーワード：CD、ゲーテの詩、20世紀歌曲

1. はじめに

個人研究費（特別支給）の助成を受けてCD制作をするのはこれで4回目となるが、毎回ドイツ歌曲を新しい切り口で紹介している。今回は「至福の憧れ～ゲーテ歌曲の現在」というタイトルで、19世紀を代表する文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832）に焦点を当て、彼の詩に付曲された歌曲を集めプログラムを組むこととした。その際に一般的である19世紀作曲家の作品に限らず、20世紀以降のゲーテの詩に付曲された歌曲にまで範囲を広げ選曲することを考え、まず手始めにこれまでに遺されているゲーテ歌曲を概観するところからこの研究は始まった。

2. 18～19世紀の作曲家とそのゲーテ歌曲について

【表1】

作曲家	生没年	歌曲（独唱用）の数	ゲーテの詩による歌曲の数
W.A. Mozart	1756-1791	33	1
L.v. Beethoven	1770-1827	78	11
F. Schubert	1797-1828	577	68
F. Mendelssohn	1809-1847	74	4
R. Schumann	1810-1856	287	16
F. Liszt	1811-1886	82	14
J. Brahms	1833-1897	194	7
E. Grieg	1843-1907	170	1
H. Wolf	1860-1903	314	57

表1は18～19世紀のドイツ語圏の作曲家の中から歌曲を多く作曲している人を選び、その歌曲の数とゲーテの

詩による歌曲の数を調べたものである。その際、原則としてピアノ伴奏による独唱曲で、出版されているものに限ることとした。

まずゲーテと同時代に活躍した作曲家の中で、モーツァルトは33曲の歌曲作品のうち、1曲のみゲーテの詩による歌曲〈すみれ〉*Das Veilchen* KV 476を遺している。モーツァルトはこの詩がゲーテの作であることは知らなかったようであり、最後に2行追加し原詩を勝手に改変するという行為を行っているが、ゲーテの方は作曲家モーツァルトを敬愛していたようである。エッカーマン Johann Peter Eckermann (1792-1854)による晩年のゲーテの貴重な記録である『ゲーテとの対話』の中にモーツァルトは再三登場し、ゲーテが14歳の時にモーツァルトの演奏を聴いた思い出、モーツァルトを美術におけるラファエロ、文学におけるシェークスピアと並ぶ偉大な人物として語るゲーテの姿が表されている。

ベートーヴェンは幼少の頃からゲーテ作品に傾倒し、詩人を崇拜して過ごしたようであり、ゲーテ歌曲を11曲遺している。その中で詩人、音楽家共に20代の時に作った作品である〈5月の歌〉*Mailed* Op. 52-4は若き息吹に溢れた佳作である。またこの二人がその後1812年に夏の避暑地であるテブリッツで邂逅したエピソードはよく知られている。

歌曲作品を600曲近く作曲し「歌曲の王」とも呼ばれるシューベルトは68曲のゲーテ歌曲を遺しており、それは今回調査した作曲家の中では最も多い数であった。彼が歌曲の創作にあたって選んだ詩は実に多彩であり、詩人の数も88人にのぼるが、その中でゲーテは最も多く取り上げた詩人であった。ゲーテは19世紀初頭のドイツにおいて、指導的立場にあり、最も高名で、最も尊敬されていた詩人であったこともあり、シューベルトはゲーテに2度にもわたって楽譜の献呈を行ったが、顧みられることはなかった。しかし、彼のゲーテ歌曲の第1作が〈糸を紡ぐグレートヒェン〉*Gretchen am Spinnrade* D 118であり、Op. 1が〈魔王〉*Erlkönig* D 328であることに象徴的に現れているように、ゲーテの詩との出会いによってシューベルトのリート様式は大きく変化し、その意味でも彼にとってゲーテはきわめて重要な詩人であった。

メンデルスゾーンは1821年12歳の時に、作曲の師であったツェルター Carl Friedrich Zelter (1758-1832)を通してゲーテに初めて紹介された。ゲーテは才気溢れる少年フェリックスを大変気に入り、その後何度もヴァイマルの自宅に招き歓待した。1830年にメンデルスゾーンは最後のゲーテ訪問を行ったが、その後に4曲のゲーテ歌曲を書いている。

シューマンはゲーテと直接の接触はなかったようだが、16曲のゲーテ歌曲を遺している。この数はハイネ Heinrich Heine (1797-1856)等への付曲に比べると決して多くないが、ゲーテの教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中に出てくる詩に付曲したものが9曲あり、特に少女ミニョンの詩に付曲した4曲の歌曲は、同じ詩に作曲したシューベルト、ヴォルフ等と並び名曲とされ、取り上げられる機会も多い。

リストもゲーテとの接触は確認されていないが、ゲーテ歌曲として14曲遺している。彼は歌曲において同じ詩に何度も改作を試みる事が多いが、この数は改作も1曲として数えたものであり、実際には6編の比較的有名な詩に付曲している。

次に、ゲーテ没後に生まれ19世紀後半に活躍した作曲家について述べる。まずブラームスは7曲のゲーテ歌曲を遺している。これは彼の200曲あまり（民謡詩への付曲作品を加えると更に多い）の歌曲からすると多いわけではなく、しかもそのどれもがあまり重要な歌曲とは見做されていない。

グリーグはその生涯に170曲の歌曲を書き、彼の全創作の中でも歌曲は重要な位置を占めている。それには彼の伴侶となったソプラノ歌手のニーナ・ハーゲルuppの存在が大きかったようである。そしてその大半は北欧の詩人の詩に付曲されているが、ハイネ、シャミッソー Adelbert von Chamisso (1781-1838)等ドイツの詩人の詩による歌曲もあり、その中にゲーテ歌曲は〈バラの咲く時に〉*Zur Rosenzeit* Op. 48-5の1曲が遺されている。

ヴォルフは、シューベルトに次いで、最も多くゲーテの詩に付曲した作曲家である。彼はその創作時代の初期

には色々な詩人の詩に取り組み、その時期に書かれたゲーテ歌曲も6曲あるが、その後集中して一人の詩人の詩に作曲をし、それが終わると次の詩人に進むというスタイルを取るようになった。メーリケ Eduard Mörike (1804-1875) の詩に53曲、そしてアイヒェンドルフ Joseph von Eichendorff (1788-1857) の詩に20曲作曲した後、1888年10月から1889年1月にかけて集中的にゲーテの詩に取り組み、51曲の作品を遺している。その中には『西東詩集』等、他の作曲家がそれまであまり取り上げてこなかった詩への付曲も見られるが、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の登場人物であるミニョン、堅琴弾き、フィリーネの詩への付曲のように、それまでベートーヴェン、シューベルト、シューマン等多くの作曲家が取り組んだ詩にも作曲している。これはヴォルフが自身の作曲能力に自信を深めていたことと、これらの詩への新しい視点からの創作が可能だと判断したからであろう。女声が比較的頻繁に取り上げる《ミニョンの4つの歌》には、ヴォルフならではのミニョンの世界が描かれており、声楽とピアノが一体となり薄幸の少女ミニョンの深い心理描写が見事に行われている。

3. 20世紀の作曲家とそのゲーテ歌曲について

【表2】

作曲家	生没年	歌曲（独唱用）の数	ゲーテの詩による歌曲の数
G. Mahler	1860-1911	45	0
R. Strauss	1864-1949	178	10
H. Pfitzner	1869-1949	167	4
A. Zemlinsky	1871-1942	110	4
A. Schönberg	1874-1951	94	2
F. Schreker	1878-1934	49	0
A. Webern	1883-1945	42	2
A. Berg	1885-1935	83	3
P. Hindemith	1895-1963	117	2
V. Ullmann	1898-1944	55	0

表2には20世紀に活躍したドイツ語圏の作曲家について調べた結果を載せた。

マーラーは前述のヴォルフと同年生まれであるが、1900年以降に作曲した作品も多いことからこちらの表に載せている。彼は『子供の不思議な角笛』に代表されるように、民謡詩（作曲者自身がそれをもとにして改変したことも多い）をテキストに用いることが多かったが、ゲーテの詩への付曲はない。

R. シュトラウスは歌曲をその生涯にわたって書いておりその数も178曲と多い。ゲーテの詩への付曲も10曲と比較的多いが、そのうちの6曲は作品番号が付けられていない初期の作品である。また作品番号が付けられた作品としては、1903年に書かれた〈見つけたもの〉*Gefunden* Op. 56-1があるが、これはゲーテが生涯に一度結婚した相手であるクリスティアーネとの出会いのことを回想して歌った詩に、シュトラウスが自身の結婚10年後に付曲し、彼の妻パウリーネに捧げたものである。それ以外には『西東詩集』の「不機嫌の書」という比較的珍しい詩3編に付曲している。

プフィッツナーは「最後のロマン主義者」とも言われ、前衛音楽に背を向け純粋にドイツ精神を追求した。彼は1884年から1931年の間（彼が15歳から62歳の間）に歌曲を167曲遺しているが、ハイネ、アイヒェンドルフ、メーリケ等19世紀の作曲家が好んで取り上げた詩人の詩に多く付曲しており、ゲーテ歌曲も4曲ある。

ツェムリンスキーは生涯に110曲の歌曲を遺しており、その中に4曲のゲーテ歌曲が含まれている。彼の最後の作品番号付き歌曲集となった《12の歌曲集 Op. 27》を、彼はゲーテの〈さすらい人の夜の歌（天から来たあなたは）〉*Wanderers Nachtlied (Der du von dem Himmel bist)* Op. 27-12で閉じている。

新ウィーン楽派の3人の作曲家、シェーンベルク、ヴェーベルン、ベルクはそれぞれ2～3曲のゲーテ歌曲を遺している。いずれも初期の習作であり（ヴェーベルンの〈似たもの同士〉*Gleich und Gleich* Op. 12-4は例外）、本格的な作曲活動の時期に入ってから彼の詩を取り上げていない。またベルクの歌曲の数には未だ出版されていない曲も含まれている。

20世紀初頭にオペラ作曲家として一世を風靡したシュレーカーは歌曲も50曲ほど遺しているが、ゲーテの詩による歌曲はない。

ヒンデミットは第1次世界大戦後のヴァイマル時代のドイツにおいて若手作曲家の旗手として活躍した。多彩なジャンルの作品に取り組み、100曲を超える歌曲も遺しているが、ゲーテ歌曲は彼の活動の最初期である14歳と19歳の時にそれぞれ1曲書いている。

シェーンベルクにも師事したことがあるウルマンはユダヤ系の出自ゆえに悲惨な最期を遂げたが、注目すべき歌曲を50曲以上遺している。しかしながらゲーテの詩への付曲はない。

そして今回調べることが出来た作曲家以外に、カール・レーヴェ Carl Loewe (1796-1869)、マックス・レーガー Max Reger (1873-1916)、ヘルマン・ツィルヒャー Hermann Zilcher (1881-1948)、ヨゼフ・マルクス Joseph Marx (1882-1964)、オトマール・シェック Othmar Schoeck (1886-1957)、エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルド Erich Wolfgang Korngold (1897-1957)、ハンス・アイスラー Hanns Eisler (1898-1962)、ヘルマン・ロイター Hermann Reutter (1900-1985)、エルンスト・クシェネク Ernst Křenek (1900-1991) 等や、20世紀生まれで興味深い歌曲を多く遺している作曲家は他にもいたが、次回以降の研究を待ちたい。

4. 曲目の決定とその配列について

以上の研究を踏まえて、CDの選曲を開始した。19世紀の作曲家の作品は質量共に多く、どの曲を選ぶべきか非常に迷ったが、シューベルトから1曲、シューマンは敢えて外し、その代わりにクララ・シューマンの唯一のゲーテ歌曲である〈すみれ〉を入れ、リストから3曲、グリーグ唯一のゲーテ歌曲である〈バラの咲く時に〉、そしてヴォルフの《ミニヨンの4つの歌》を選択した。そして20世紀の作曲家からは、ヴェーベルンとツェムリンスキー各2曲、R. シュトラウス、トゥルンク、デッサウ、アイスラー、アイヴズから各1曲を選んだ。それに加え、2019年のリサイタルの委嘱作品であった伊藤祐二の《J.W.v. ゲーテの4つの詩》より〈リーナへ〉と〈至福の憧れ〉を取り出し、2曲で成立するように改変した短縮版を入れた。それから、計13人、21曲の配列をどうするかにも頭を悩ませ、試行錯誤を繰り返した。単純に時代順に並べる可能性もあったが、それぞれの作品の音楽的繋がりやコントラストを見極め、各曲の持つ調の接続なども吟味して決めた。R. シュトラウス〈見つけたもの〉から始め、C. アイヴズ〈イルメナウ〉で終わるこのプログラムによって、現代における「ゲーテ歌曲」の一つの姿を提示出来るのではないかと思ひ、以下のようなプログラムに決定した。

5. CD制作の概要

CD《至福の憧れ～ゲーテ歌曲の現在》*Selige Sehnsucht — Goethe Lieder*

演奏：長島剛子（ソプラノ）、梅本実（ピアノ）

録音：相模湖交流センター「ラックスマンホール」

収録日時：2022年8月7日、11日、16日

録音技師・ディレクター：山中耕太郎

ピアノ調律：友野篤史

製造・発売元：299 MUSIC / レック・ラボ

販売元：東武トレーディング

発売日：2023年5月10日

< 曲目 >

- リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949)：〈見つけたもの〉 *Gefunden* Op. 56-1 (1903)
 クララ・シューマン Clara Schumann (1819-1896)：〈すみれ〉 *Das Veilchen* (1853)
 アントン・ヴェーベルン Anton Webern (1883-1945)：〈花の挨拶〉 *Blumengruss* (1903)
 エドヴァルド・グリーグ Edvard Grieg (1843-1907)：〈バラの咲く時に〉 *Zur Rosenzeit* Op. 48-5 (1889)
 フランツ・シューベルト Franz Schubert (1797-1828)：〈月に寄せて〉 *An den Mond* D 296 (1815-16)
 フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886)：〈喜びも悲しみも〉 *Freundvoll und leidvoll* S 280/2 (1849)、〈全ての山の頂きに安らぎが〉 *Über allen Gipfeln ist Ruh* S 306/2 (1859)、〈天から来たあなたは〉 *Der du von dem Himmel bist* S 279/1 (1842)
 アレクサンダー・ツェムリンスキー Alexander Zemlinsky (1871-1942)：〈妖精の歌〉 *Elfenlied* Op. 22-4 (1934)、〈旅人の夜の歌〉 *Wandrer's Nachtlied* Op. 27-12 (1938)
 リヒャルト・トゥルンク Richard Trunk (1879-1968)：〈ズライカ〉 *Suleika* Op. 40-5 (vor 1927)
 パウル・デッサウ Paul Dessau (1894-1979)：〈愛の歌〉 *Liebeslied* (1955)
 ハンス・アイスラー Hans Eisler (1898-1962)：〈ゲーテ断章〉 *Goethe-Fragment* (1953)
 アントン・ヴェーベルン Anton Webern (1883-1945)：〈似たもの同士〉 *Gleich und Gleich* Op. 12-4 (1917)
 伊藤祐二 Yuji Itoh (1956-)：《J.W.v. ゲーテの4つの詩》より *from 4 Poems by J.W.v. Goethe* (2019)、〈リーナへ〉 *An Lina*、〈至福の憧れ〉 *Selige Sehnsucht*
 フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903)：《ミニョンの4つの歌》 *Vier Lieder der Mignon* (1888)、ミニョン第1曲〈語らずともよいと言ってください〉 *Heiss mich nicht reden*、ミニョン第2曲〈ただ憧れを知る人だけが〉 *Nur wer die Sehnsucht kennt*、ミニョン第3曲〈もうしばらくこのままの姿に〉 *So lasst mich scheinen*、ミニョン〈君よ知るや南の国〉 *Kennst du das Land*
 チャールズ・アイヴズ Charles Ives (1874-1954)：〈イルメナウ〉 *Ilmenau* (vor 1902)

6. CD制作の成果

CDを本年5月にリリース後、音楽雑誌数冊にも取り上げられたが、『音楽現代』2023年7月号には注目盤として「特定のドイツ詩人の、様々な状況で書かれた歌曲を集めるという、日本では非常にユニークな注目すべきディスクだ。特定詩人の連作歌曲集でも味わえない多様な世界、いや真の意味での世界観、愛や自然へ共感的な眼差しを注いでの広く深いゲーテ芸術が迫ってくる。(中略)どの作曲家の作品でも、歌、ピアノとも大袈裟で行き過ぎた演奏表現はなく、誠実に丁寧に詩と音楽の世界を音響化している。(後略)」(p. 92)とこのCDのレビューが掲載される等、この企画の意図がある程度理解され評価されたことを感じ、嬉しく思っている。

謝辞

このCD制作は「2022年度国立音楽大学個人研究費(特別支給)」の助成を頂きました。ここに深く感謝の意を表します。

主要参考文献

- 村田千尋『シューベルトのリート 創作と受容の諸相』、音楽之友社、1997年
 エッカーマン、ヨーハン・ベーター『ゲーテとの対話 中』、山下肇訳、岩波文庫、1968年